



ぱかぱか漂う
第4回

懐かしき待ち時間



おととしも昨年もクリスマスに間に合わなかつたタペストリーをやつと完成させました。ブラジル滞在中に習った毛糸刺繡で作つたものです。私は2年前まで夫の赴任に伴い、家族でブラジルに暮らしていました。住んでいたのは大都市でも観光地でもない辺鄙な町。日本人学校もインターなしショナルスクールもなく、私の3人の子供は現地校に通いました。

「なんとかなるよ」と、完全ポルトガル語の小学校と幼稚園に我が子たちを放り込んでしまつたわけですが、それは想像以上に過酷な毎日でした。親も一切ポルトガル語を知らなかつたのですから。

子供が学校に行つてゐる間は、その日に使わぬ教科書の単語をひたすら辞書で引き、授業で何を勉強しているのかだけでも説明できるようにしていました。子供の帰宅後は学校の宿題と日常会話の勉強を何時間も一緒にしてきました。

る?」と何度も繰り返し、私の言葉もゆづくり待つてくれました。

毎週教室に行くたびに、先生と生徒たち一人ひとりから「会いたかった。元気? 大丈夫?」と、抱きしめられました。タペサリア教室は私にとって「娘」に戻れる場所だったのだと思います。子供が学校で辛い思いをしないように守る。治安面での危険から守る。日本では意識しなかつた「子供を守る」という緊張感から、唯一解放される時間でした。

無心になると頭がすつきり

教室にいる間はおしゃべりばかりで刺繡はほとんど進みません。分からぬところを質問して、あとは一人の時に刺し進めていました。特に待ち時間。ブラジルでは学校行事さえ平気で1時間も開始が遅れるので、やたらと待ち時間があつたのです。タペサリアを始めて以来、待つことはむしろ楽しみにもなっていました。



文・写真
小宮華寿子
出版社編集部員
経て、フリー
者をランスの編集者
に。2男1女の母。著書に『ブラジルの手しごと』(メイツ出版)がある。



イラスト
・デザイン
寺沼麻美
切り絵作家、時々
デザイナー。ゆ
らゆらゆれる北欧風手作りモビール『ネコ・パブリッシング』を監修。

しかし帰国してからといふもの、電車の乗り継ぎはスムーズだし、友達は約束の時間にきちんと来るしで、待ち時間はめっきり減りました。それがなんだか少し残念…。

タペサリアは針の動かし方を覚えてしまえば単純作業。刺繡をしている時間は頭の中がからっぽになります。そしてその後、すつきり落ち着いた気持ちになつていることによく気づきます。便利で時間に正確な日本では、動こうと思えばいくらでも忙しくなつてしまいますがね。だからこそ、無心になれる時間はあえて設けた方がいいのかな、なんて最近は考えるようになりました。

学校や園から行事や用意するもののお知らせをもらつてくると、それらを解読するのに2時間は要します。それでも正確に読み取ることができず、学校で必死に頑張っている子供に寂しい思いをさせてしまつたことが何度もありました。

そんな生活にもなんとか慣れてきた頃に出会つたのが、毛糸刺繡の教室です。現地ではタペストリーを意味するタペサリアと呼ばれています。純毛の極太毛糸で刺す刺繡はそれまで見たことがなく、温かみとボコボコ感に一目ぼれでした。

タペサリア教室の生徒は、私の母親世代が中心。ブラジル人はおしゃべり好きなのですが、おばあちゃんたちはとにかくしゃべってガハハと笑つて、少し手を動かしてまたしゃべつて。手作りのお菓子を持ち寄つて食べて、またしゃべつて笑つて。

ポルトガル語のつたない私も必ず話に巻き込みました。「カズコ、わか